

監修のことは

私が初めて監修した肺癌診療のための書が、医薬ジャーナル社から出版された「肺癌内科診療マニュアル～EBMと静岡がんセンターの臨床から～」である。

静岡がんセンターでは、優れたスタッフ、やる気のあるレジデントに恵まれて、充実した肺癌診療をおこなっていた。その頃、不遜ではあるが、自分達の診療をエビデンスに基づかないものも含めて冊子化することが、静岡がんセンターに学びに来たレジデント、もしくはそれ以外の医師にも何らかの役に立てるのではないかと考えた。その思いが前書を企画したひとつの理由であった。幸いなことに、前書は大したお叱りも受けず、肺癌診療を志す多くの若い医師たちに受け入れられ、一部ではバイブル的な扱いもされつつ、予想外の版数を重ねた。ただ肺癌の治療方法はこの数年で長足の進歩を遂げており、前書が出版された2011年とは状況がかなり変化してきている。そのため、『エビデンスがないものも含める』というコンセプトはそのままにして、前書の内容をUPDATEすることが必要不可欠になった。

前書の監修者であった私も、編者であった宿谷威仁医師、三浦理医師も現在静岡がんセンターに在籍しておらず、それぞれが母校で肺癌の診療、研究を続けている。そのこともあり、関係各所と協議した結果、前書の改訂版を出版するのは困難と判断し、本書では「新版」とのタイトルをつけさせていただいた。執筆者はすべて我々の仲間であり、肺癌診療に対するフィロソフィーが一致していることは変わらず、逆にさまざまな施設に散ったことで、独善的な部分が少なくなり、前書よりもさらに良いものができたのではないかと考えている。

最後に、忙しい中、私の新版を作りたいというわがままにつきあって、本書の企画から校正までのほとんどすべてのことを請け負ってくれた、編者各位に厚く御礼申し上げます。

2015年3月

山本 信之

編集のことは

「肺癌内科診療マニュアル～EBMと静岡がんセンターの臨床から～」の出版から約3年半が経過した。この間に、ペメトレキセドの continuation maintenance を検証した PARAMOUNT 試験，クリゾチニブ承認と PROFILE1014 試験，アレクチニブ承認（AF001-JP 試験），アフアチニブ承認（LUX-Lung 試験）など肺癌の化学療法には大きな変化がみられた。また，支持療法においても，パロノセトロンを HEC レジメンで有用性を検証した TRIPLE 試験などが報告され，さらに鎮痛剤の選択肢も広がってきている。本書では，これらのエビデンスも取り入れ，実臨床でどのように用いられるべきかに関して記載している。また，抗 VEGFR2 抗体であるラムシルマブ，抗 EGFR 抗体であるネシツムマブ，第2世代 ALK 阻害剤のセリチニブ，第3世代 EGFR-TKI など，今後臨床に導入される可能性の高い薬剤に関しても簡単に触れている。

一方で，肺癌診療は他の癌腫と比較すると，系統だったエビデンスが蓄積されてきている分野ではあるものの，未だそれは十分なものとはいえない。そのような中で肺癌診療にかかわる医療者は，試行錯誤の上で日々治療方針の決定を迫られていると思われる。このマニュアルは確立されたエビデンスのみならず，日常診療における疑問にも答えるべく，作成されている。

前書では，静岡がんセンター呼吸器グループ内で discussion を行いながら，原稿の執筆・編集を行った。今回は，静岡がんセンターで働いていた経験があり，現在は新たな施設で臨床試験と臨床現場の最前線で活躍している医療者に執筆を依頼した。本書は静岡がんセンターでの臨床試験・実地診療・緩和療法の経験に他施設での経験が混じり合い，より多くの医療者に役立つマニュアルになると信じている。

2015年3月

赤松 弘朗
宿谷 威仁
三浦 理
鋳持 広知